

ホツマツタエ「ゆかりの地」を歩く

(第 42 号)

おとぎ話 筑紫ウマシの浜は、竜宮城か (その 2)

吉 田 六 雄

高千穂を後にして

8 月 10 日、高千穂での朝は小雨であった。宿の「ホテル四季見」では、高千穂ならではの朝食が準備されていた。お品書きを見ると 12 品になり、「釜炊きめし、そばかゆ、味噌汁、祖母山まめ、地とうふ寄子、神楽宿地鶏卵、そばフレーク牛乳煮、油味噌、椎茸平野椎茸モロヘイヤ佃煮、山女魚の一夜干し、山菜佃煮、香柳たっぷり」とあり、その料理がお膳に並べられていた。そして朝食を美味しく頂きながら、昨夜の夜神楽の余韻を思い出していた。それにしてもこの「高千穂町」は、天孫降臨の地なのか。ホツマツタエ文献では「ニニキネ」が天孫降臨した山は「高千穂峰」と述べている。このことから「高千穂峰」が高千穂町にないが・・・と思いつつ、この小さな疑問を解決しないまま、高千穂町のバス発着所より産交バス、JR九州と乗り継ぎ、延岡経由宮崎へと移動した。宮崎到着は正午であった。

青島神社へ

宮崎駅近くのニッポンレンタカーにて、スズキの「スィフト」を貸し出してくれた。その車のオドメーターの目盛りはなんと 650 km であり、係員は笑顔で説明しながら「新車ですよ」と云っていた。今日の「ゆかりの地を歩く」の予定の訪問地は、鶴戸神宮と都井岬である。宿は「都井岬観光ホテル」を予約している。その間の道程は約 65km である。そしてもう一つ「ゆかりの地を歩く」のプランに入れることを忘れていたが、「青島神社」の訪問である。さあ出発。宮崎駅前より青島神宮までは、約 13km である。晴れ渡った日向灘を遠く左手にして出発した。しばらく快適に国道 269 号、220 号を走る。すると急に空模様が怪しくなり土砂降りの「にわか雨」に突入してしまった。前方が見えないくらいの大雨である。5 分くらい続くと突然の快晴が現れた。この急変の天候は、日向灘特有の亜熱帯気候だろうかと思いながら、青島神社のある青島の入り口に着いた。近くの駐車場に車を置いて、左に青島ビーチを見ながら、青島に至る海上の長橋を歩いて青島に行った。島の入り口の右側には、鬼の洗濯岩と呼ばれる波状岩が見られ、青島の原風景を形成しているようだ。

青島神社

青島神社のある青島の形状は、周囲約 1km の海上の「小島」と表現すると、初めての人にもわかりやすいだろうか。そこに渡るには青島ビーチ側より長い橋（弥生橋）を通って渡ることになる。そして島の西側の海岸沿いから少し入った所に、「青島神社」があった。その青島神社の社殿の造りは、朱塗りで扇子を下向きにした屋根に特徴があった。そして青島神社の案内板を見ると、御祭神は「天津日高彦火火出見命」「豊玉姫命」「塩筒大神」となっていた。またご由緒には、「彦火火出見命が海宮からお帰りのときの御住居の跡として三神をお祀りしたと伝えられている。・・・(後略)・・・」と記載してあった。そしてこのご由緒に記載されている「天津日高彦火火出見命」は、ホツマツタエ文献に登場する名前は、「ホオデミ」「ウツキネ」「ウツギネ」および「ケ牟の神」になっている。それにしても、「彦火火出見命が海宮からお帰りの・・・」と説明されており、「彦火火出見命が海宮からお帰りの・・・」とは、どう云うことであろうかと思いながら、青島神社の境内に入っていくと、「海幸彦、山幸彦」を展示する「日向神話館」があった。その神話館には、「第 1～12 景」に仕切られた部屋があり、ロー人形と風景で神話の場面が、ガラス越しに再現されていた。そしてこの展示の説明書がないか青島神社・社務所に行くと、「日向神話、青島神社（誰

でも分かる解説書)」と称する小冊子があった。頁を開くと行く4～13頁に、第1～12景の展示の解説があった。ここでは紙面の都合で、全頁を説明できないため、まず目次で説明しようと思う。(括弧内は、補足文)

- 第1景・ニニギノミコト、アマテラスオオミカミに命じられ、天降る
- 第2景・コノハナサクヤヒメ、火中の産屋で(3人の皇子を)出産する
- 第3景・ウミサチヒコとヤマサチヒコ(得意の釣針と弓を交換して見た)
- 第4景・ヤマサチヒコ、シオツチノオジに送られ(釣針を捜しに海の世界の)海神の宮を目指す
- 第5景・(海神の宮の前の)木の上で待つヤマサチヒコ、トヨタマヒメと会う
- 第6景・海の神様、ヤマサチヒコを厚くもてなす
- 第7景・(海の国での)ヤマサチヒコとトヨタマヒメ(との新婚生活と帰宅願望)
- 第8景・海の神様、タイの魚から(ヤマサチヒコが捜していた)釣針を取り出す
- 第9景・ヤマサチヒコ、海神の宮を後に(地上の世界に帰郷)する
- 第10景・ヤマサチヒコ、ウミサチヒコを魔法のタマを使い、苦しめる、
- 第11景・トヨタマヒメ、産宮でウガヤフキアエズノミコトを産する
- 第12景・大和を平定し初代天皇「(神武天皇)」に即位する

その内容は第1景、アマテラス神の孫の「ニニキネ」の天孫降臨。次ぎにニニキネの皇子の「サクラギ」と「ウツキネ」の海幸彦、山幸彦の物語。そしてウツキネの皇子の「カモヒト」の誕生。最後はカモヒトの皇子の「タケヒト」が、ヤマトを平定して天皇になるまでの場面であった。特に第12景中の第3～10景には、「海幸彦、山幸彦」の物語があり、ここ青島神社が、その海幸彦、山幸彦に「ゆかりの地」であると思えて来た。だが青島神社の「海幸彦、山幸彦」物語のストーリーは、ホツマツタエ文献の「海幸彦、山幸彦」物語のストーリーと若干違うようである。その大きな違いは、非現実な「海の世界」や「海の国」が、「日向神話、青島神社(誰でも分かる解説書)」にはでてくる。このことは現在では、おとぎ話の領域に入る。一方ホツマツタエ文献では、「海の国」ではなく、「北の津」から「鴨船」で「筑紫」に出航など、あくまで現実的な世界のできごとである。・・・この違いをよりわかって頂くため、「海幸彦、山幸彦」物語の場面々々について、「ホツマツタエ」文献、「日向神話、青島神社(誰でも分かる解説書)」の順で記載して見ました。是非その違いについて、堪能して読んで下さい。

「海幸彦、山幸彦」物語の比較

ホツマツタエ文献-25文

前景

時は、ニニキネの父君である「オシホミ」が箱根の洞にて、神上がりされた後のスス暦の33鈴667枝3穂、今から3054年前の紀元前1046年のことである。ニニキネの天君は、今の滋賀県の瑞穂国に宮を遷られた。ニニキネの長男のムメヒトはハラ宮に留まりホツマ国を治められた。次男のサクラギは茨城の新治宮より、滋賀県高島市の鵜川宮に遷られた。三男のウツキネは、栃木県日光市のフタアレ山(二荒山)裾野のウツノ宮(宇都宮)より、新しく造られた滋賀県大津市のシノ宮を賜れて遷られた。

第3景

遷られた次男のサクラギは、琵琶湖で魚釣をして楽しまれたため、海幸彦と云われた。またウツキネは、常に山で狩りをして楽しまれたため、山幸彦と呼ばれた。その頃、筑紫の国が治まってないことに心痛めたニニキネは、「筑紫は食糧が不足している」。「できれば行って田を増やそうではないか」と云われて、長男のムメヒトを親君にして瑞穂国を治めさせ、ウツキネとサクラギ(スセリ)の二人には、北の津(福井県敦賀)に行きて治めさせ、「二人で仲良く睦めよ」と言い残されて、兵庫県西宮より亀船に乗り筑紫に出かけられた。北の津に赴任したサクラギ(スセ

り)とウツキネであるが、次男のサクラギは毎日釣りをして楽しまれ、また三男のウツキネは狩りをして楽しんだ。ある日サクラギの海幸彦が、ウツギネの山幸彦に云った。試しに二人の道具「釣り」と「狩り」を替えて見ないかと誘った。山幸彦もうなずいたので交換して見た。海幸彦は弓矢を取って、山に狩りに出かけた。山幸彦は海に入り、釣をして見た。しかし二人共に空しく獲物を捕ることが出来なかった。そこで海幸彦は弓矢を山幸彦に返すと同時に、釣針を「返してくれ」と云った。だが山幸彦は釣針を魚に取られて、返すことができない。そこで山幸彦は新しい釣針を返そうとしたが、海幸彦は釣針を受け取ってくれない。海幸彦は山幸彦に、しつこく元の釣針を返せとせがむ。困った山幸彦は自分の太刀を釣針に作り替えて、一蓑(ヒトミ)に盛って返すが、海幸彦の怒りは治まらずなお怒る。「沢山はいらない。元の釣針を返せ」と。

第4景

山幸彦は浜辺に出てうなだれて憂いている時、浜辺の近くで「一羽の雁が罾に掛かっていた」。その姿を見た山幸彦は、「困り果てている雁」を、罾より解いて逃がしてやった。この山幸彦の優しい振る舞いを見ていた塩筒の翁は、ただならぬ山幸彦の様子に「何か、心配ごとがある様だね」と尋ねた。山幸彦は海幸彦とのできごとを、ありのまま塩筒の翁に話した。それを聞いた塩筒の翁は、「ホホデミ(山幸彦)君、心配することはない。翁に凶りごとがあるんじゃないよ」と云いながら、魚取り用の目無し片網を準備して、鴨船(古代の帆船)に乗り、ホホデミ(山幸彦)君と塩筒の翁は、北の津を後にして、筑紫ウマシの浜に辿り着いた。

第5景

そして浜に帆船と網を置いて歩き出すが、遠くの山間に見える鹿児島県曾於のハデ神の瑞垣の館は、夕日を浴びて輝いて見えた。そして道中に日も暮れたため、はゑ葉や譲葉を敷いて、一夜の朝を寝ながら待った。年の朝を迎えて、ハデ神の瑞垣の館の雨戸が開くと、大勢の女が出てきた。そしてハデ神の若姫が、井戸から年の初めの若水を汲もうと、釣瓶からマリ(椀・おワン)に水を注ぐと、マリの水面にホホデミの影が写った。驚いた若姫は家に入り、ハデ神に知らせた。それを聞いたハデ神は察した。「天つ神か、滅多に家に来ない・希人か」と。そしてハデ神は、遠くに見える容姿を望み見て思った。そして「天皇子」と察するや八重の畳を敷き、若い君(ホホデミ)を家に迎え入れ、ご訪問された訳をお尋ねした。

第6景～第7景

「日向神話・海の神様」が、ホツマツタエに出てこないため文章にできず。

第8景

ホホデミ君は「魚に釣針を取られたこと」を述べた。その話を聞いたハデ神がしばらく考えている時、鵜戸を守っている「鵜戸守」が、新年の挨拶に来て述べるには、「目無し片網」「鴨船」が浜に放置されている。その網や鴨船は誰のものだろうか。そして年の朝、歌が染められている「目無し片網」を見ると、和歌が詠まれてあった。

シホツツが 目無し片網
張るべらや 満ち干の玉は
ハデの神風

時にハデ神は、海女たちを集めて皆に相談した。釣針を探す方法は、「目無し片網」を引いてはどうだろうか。すると引き女は「目の粗い網」はどうだろうか。またクチ女は、「釣も良いのでは」。また赤女の一人は、「目無し片網」を張りましようとして申し出た。ここでハデ神は海女たちに、赤女を手伝って、目無し網を張るように指示した。赤女たちは「目無し片網」で、四方より追い込んで魚を取っていると、大鯛がグチを噛み裂き赤女の方に寄って来た。するとグチの口元

に、北の津で山幸彦が魚に取られた「釣針」を見つけた。そこで赤女は、グチの口元より釣針を外してやり、大鯛に「生簀で待つべし」と告げた。そしてハデ神に赤女が「釣針」を届けると、ハデ神は「グチの口元に釣針がある」ことを、すでに知っていた。・・（中略）・・ハデ神とホホデミ君は、赤女の功績を褒めてやり、ヨド姫の名を授けた。そこでこの様にして、北の津で魚に取られた「釣針」を取り戻すことができ、ホホデミ君は、大いに喜ばれた。そして海幸彦（サクラギ）に釣針を返そうと、志賀の神に頼まれた。

第9景

「日向神話・海神の宮」が、ホツマツタエに出てこないため文章にできず。

第10景

山幸彦（ホホデミ）に頼まれた志賀の神は、ワニ船に乗り大津のシノ宮に出かけた。シノ宮では、ヤマクイの招きを受けた。そしてヤマクイの家臣と共に志賀の神は、次男のサクラギが住んでいる滋賀県高島市の鵜川宮に行って、サクラギに会われた。そしてサクラギは、今日、志賀の神が鵜川宮に来た目的を、ヤマクイに問われた。ヤマクイは「この釣針は昔、ホホデミがサクラギより釣針を借りて、魚に取られた釣り針です。今グチの口元より取り外して、弟宮のホホデミから志賀の神を遣いとして、返却がありました。」と答えた。そこで志賀の神は、釣針をサクラギにお返しすることができた。サクラギは釣針を見て、「わが釣針ぞ」と云いながら立ち去ろうとした。その様子を見た志賀の神は、サクラギの袖を引いて「待ちぢ」と申し上げれば、兄宮のサクラギは、怒り出した。「釣針を無くしたのはホホデミではないか。自分の落ち度もわきまえず、我をなぜ呪う。兄を敬っておれば、弟は自ら兄の前に来る筈。」それを聞いていた志賀の神の答えは「いやそれは違う。海幸彦と云われる釣りの達人であれば、朽ちた釣り糸を新しい糸に替えて貸して上げる筈。このことの理屈を知って貸していれば、事故はなかった。知らないで弟へ貸したのであれば、弟の駒這いになって、詫び言あれ」と申し上げれば、サクラギはなお怒り、怒った勢いで沖に逃げようと船を漕ぎ出した。こんなこともあろうかと、ハデ神は「満ち干の玉」を、志賀の神に預けていた。

シホツツが 目無し片網
張るべらや 満ち干の玉は
ハデの神風

そして志賀の神は「干の玉」を、琵琶湖の海に投げた。すると湖は一瞬にして干し上がり、船が立ち往生した。そこに志賀の神が追いつき、サクラギの船に飛び乗る。すると兄宮（サクラギ）は、船より飛び下りまた逃げ出す。そこにヤマクイも駆け寄り、兄宮が逃げないように手を引いた。そこで志賀の神は、「満ち玉」をまた投げると、満ち玉で水が溢れた。すると兄宮は泳げず、沈みかけながら「汝を助けよ。そして我は末永く、弟（ホホデミ）の守りに一生懸命に尽くすから」と叫んだ。このことで兄宮は許されて、兄宮（サクラギ）、志賀の神、ヤマクイは、迎の船に乗り、鵜川宮に帰って行った。鵜川宮に帰った兄宮（サクラギ）、志賀の神、ヤマクイは、仲直りの酒を酌み交わして、それぞれ国に帰って行った。

コメント

ホツマツタエ文献の「海幸彦、山幸彦」のクライマックスのシーンは、志賀の神が、サクラギを諭す場面に尽きる。現在人には古代人の言葉「海幸彦と云われる釣りの達人であれば、朽ちた釣り

糸を新しい糸に替えて貸して上げる筈。このことの理屈を知って貸していれば、事故はなかった。」を肝に銘じなければならない。この言葉ことが将に、プロが素人に対する時の態度である。志賀の神の「人間味、溢れた言葉」である。現在人でも、このことと同じ意味の言葉を述べた経営者がいた。それはあの自動車メーカーの「ホンダ」の創始者の「本田宗一郎」であった。

「日向神話、青島神社（誰でも分かる解説書）」

次ぎに日向神話を、ホツマツタエの「海幸彦、山幸彦」と読み比べて下さい。

第4景

どんなに探しても釣針をみつけられないヤマサチヒコが困っていると、おじいさん（シオツチノオジ）がやってきて「どうしてそんなに困っているのですか。」と聞きました。ヤマサチヒコがわけを話すと、あっという間に船を造り、「この船で海の世界に行きなさい。」といいました。ヤマサチヒコはおじいさんの言う通り、その船に乗って海の底深くに潜っていきました。

第5景

さて、海の世界に行ったヤマサチヒコは、海神の宮という家の前にある大きな木の上に登っていました。そこは海の世界をまもっている神様（ワタツミ・トヨタマヒコ）の家でした。すると、そこに井戸の水を汲もうとしたトヨタマヒメがやってきました。木の上に人がいるのを見てびっくりしたトヨタマヒメは急いで家に帰って「井戸に水を汲みに行ったら、そばの木の上に男の人がいました。その人とても立派なお顔をされていて、きっととても偉い人だと思います。」と両親に話しました。海の神様が「あなたはどなたですか。」と聞いたので、ヤマサチヒコは「私は天から降りてきた神の皇子です。」と答えました。

第6景～第7景

「日向神話・海の神様」が、ホツマツタエに出てこないため文章にできず。

第8景

娘から話を聞いた海の神様は、ヤマサチヒコが探しているお兄さんの釣針を見つけてあげようと、海の世界の全部の魚を集めました。すると魚たちが「鯛が、口が痛いと言って来ていません。」というのでその鯛を呼び出して口の中をみるとヤマサチヒコの針が刺さったままになっていました。そして、この針を海の神様が取ってあげました。

第9景

「日向神話・海神の宮」が、ホツマツタエに出てこないため文章にできず。

第10景

地上の世界に帰ったヤマサチヒコは、海の神様に教えられた通り、釣針を投げて返しました。お兄さんのウミサチヒコは怒って受け取らず、困ったヤマサチヒコは魔法の瓊（たま）を取りだしました。すると海の波がザブンザブンとやってきてウミサチヒコをおぼれさせました。海におぼれるウミサチヒコは「私が悪かった。これから何でもいうことを聞くから、どうか助けてください。」とオマサチヒコに頼みました。ヤマサチヒコはもう一つ魔法の瓊（たま）を取り出しました。すると波がスーツと引いてウミサチヒコはおぼれずにすみしました。

コメント

海の世界、海神の宮、魔法の瓊（たま）など、メルヘンの世界を想像させてくれて、夢見る子供には、大変に人気がある。

海幸彦、山幸彦の物語が教えてくれるもの

如何でしたでしょうか。私もこの海幸彦・山幸彦の物語について、幼少の頃より童話として親しんで来ました。だが、ホツマツタエ文献の「海幸彦、山幸彦」に接してからは、日向神話など、古事記に記載された「海幸彦、山幸彦」のストーリーは「メルヘンチック」に見えてしょうがない。そして「海の国」「海の神様」が、のちの浦島太郎の「竜宮城」へと進化して行く。また「満ち干の玉」が、「玉手箱とお爺さん」へと変化して行く。それは童話を書かれた時代背景から来る「未来志向」や「空想願望」が成長して行く。そう考えると天上に登って行くあの「かぐや姫」も、海幸彦・山幸彦の延長線上に思えて来るのは、私ばかりでしょうか。

青島神社の元宮

青島神社の拝殿にお参りしてから右手の方に行くと、亜熱帯の樹木が数多く繁っていた。その亜熱帯の林の中に、朱色に塗られた「青島神社の元宮」があった。その社は高さ約 2m 程度。そんなに大きくない社の中の社として、小さな神社が祀られていた。そしてその前には、狛犬の二体が祀ってあった。そして御祭神の「天津日高彦火火出見命」「豊玉姫命」「塩筒大神」にお参りして、青島神社を後にした。次の「ゆかりの地」の訪問は、鞆戸神宮である。

(おわり)

(ご報告!)

この3月、読者より「継続して読みたい」との声を反映して検証ホツマツタエに連載した初号～40号までの「ホツマツタエの暦の考察」「ホツマツタエ再発見」や「ホツマツタエゆかりの地を歩く」や「他」を一冊の単行本(約200頁強)にまとめました。希望者多数の場合は、増刷を予定しております。

一冊:製本代(含む送付代)を、時価にて分譲(安価)したいと思います。

ご希望者の方はご連絡して下さい。